

牧野英二『京都学派とデイルタイ哲学…日本近代思想の

忘却された文脈』法政大学出版社 2024年

ハンス・ペーター リーダーバッハ

1.

本書は、研究上の空白を埋めているものである。実際のところ、これまで日本国内外を問わず、京都学派の哲学者たちに対するデイルタイの影響、そして解釈学の偉大な思想家かつ精神科学の理論家としてのデイルタイに対する彼らの受容と対決が、独立した研究テーマとして扱われることはなかった。確かに、研究文献においてデイルタイの日本における影響作用史に関する断片的な言及は存在するものの、著者は初めてこの問題を包括的に取り上げ、一つの著作として結実させた研究者である。著者はデイルタイと京都学派の哲学者たちとの間の歴史的に確認可能な関係性の描写にとどまらず、西田らによるデイルタイ受容の体系的・方法的含意を主題化することを特に重視している。この意味において、本書はデイルタイの日本における影響作用史の解明に寄与するだけでなく、解釈学的哲学への独

自の貢献ともなっている。

これまでの研究においてデイルタイの日本における影響作用史が継子扱いされてきたには、それなりの理由がある。著者が指摘するように、新カント派、フッサール、とりわけハイデガーによる解釈学的哲学の変容、そして後にガダマーによる変容が、デイルタイに対する肯定的な評価を困難にしてきた。このことは特に、ハイデガーの影響下にあつた田辺、和辻、三木にあてはまる。著者はこのことを示すために、デイルタイとヨルク伯の間の議論、それに対するハイデガーの解釈、そしてそれを介した田辺らによる受容を、綿密に跡づけている。

このような批判ないし変容の再検討が必要とされる理由は、とりわけデイルタイ全集（2006年完成）の継続的な刊行、そして著者も共同編集者として携わつた日本語訳の最近の完結により、新たな知見が明らかになつたためである。これらは主として、デイルタイの歴史的理性批判のプロジェクトが彼の全著作においてどのような位置を占めているかという問題に関わっている。著者が強調するように、デイルタイは晩年において自らこのプロジェクトを検証し、人間の意志と感情を考慮に入れることで理性の地位を相対化したのである。

研究史は、デイルタイの解釈学のこの側面が、ハイデガーによつても西田、田辺、和辻によつても考慮されなかつた理由を説明する助けとなるかもしれない。このことにより、彼らがデイルタイの歴史的理性をカント的な様式で解釈したことも理解できる。しかしながら、後期デイルタイは、理性が常に歴史的・社会的に制限されており、それゆえに決して純粹たりえないことを洞察していた（38頁参照）。このデイルタイの転回を中心に生概念が位置している。それは主観と客観、文化と自然などの二元論を超えた根源的な領域を指し示している。著者はこの領域にデイルタイと京都学派との間の実り多い対話の可能性を見出している（23―24頁参照）。

著者はデイルタイの転回を契機として、方法としての解釈学を新たな視点から照射している。そのために著者は「へ

だたり」という概念を導入し、それを「類似性」(あるいは「近さ」とも言うる)という概念と対比させる。著者の解釈において表現されているのは、近さとへだたりの相互作用である。へだたりは何かを可視化する。それは、あまりに近すぎでは見えないものを視野に入れることを可能にする。同時に、へだたりを取ることによつて、これまで認識されていなかった近さの関係を認識することができる。へだたりはガダマーの時間的隔たりとは異なる。なぜなら、著者が示しているのは影響作用史の解釈学の新しい領域への適用ではなく、さまざまな布置状況 (constellations) の構築だからである。著者の解釈は、ガダマーのいう「伝承の出来事への(受動的な)参入」ではなく、新しい伝承の系譜の(能動的な)開示なのである。このような背景において、著者がガダマーと一致して、自らも示している過程的な理解の中に、伝統的な主観主義の観念とは相容れない要素を主張していることは象徴的である(11頁参照)。

しかし、へだたりは著者によつて解釈の対象(テキスト)の間にのみ設定されるわけではない。著者自身も、ハイデガーとガダマーのディルタイ批判にへだたりを置くことで、ディルタイとヨルク伯の間の哲学的な近さを可視化し(65頁参照)、それがさらに田辺のディルタイ受容の評価にとつて有益となつている(69頁以降参照)といった形で、みずから関与させている。このような例は、へだたりと近さが単に存在しているのではなく、布置状況の構築によつて可視化されねばならないことを示している。

ディルタイと京都学派との創造的な対峙のためには、対象(テキスト)についての親密な知識が必要である。いうまでもなく著者がこのような知識を豊富に有している。教科書的なディルタイ像を西田らによる受容と対比させるのではなく、著者は新しいディルタイ研究の知見を活用して、差異(へだたり)をよりよく評価し、類似性(近さ)を浮き彫りにしている。同時に、著者は京都学派の国内の解釈者の研究成果とも対峙している。最も著名なのは木村敏、唐木順三、湯浅泰雄であろうが、飯嶋裕治のような若手研究者にも言及がなされている。本研究は全体として見れば、

京都学派の哲学についての研究への貢献でもある。(このような学問的な誠実さの態度がより多くの模倣者を獲得することを願う。とりわけ京都学派の哲学の形成にとつて決定的な意味を持った19世紀のドイツ哲学(カント、フイヒテ、シェリング、ヘーゲル)に関して、現在の研究状況があまりにも頻繁に無視され、因習的ではあるが事実としては時代遅れとなった見方の形式的な繰り返しが行われている。)

著者の個々の考察について詳しく批評することは、この書評の紙幅を超えてしまうだろう。そのため、以下では一般的な指摘にとどめておきたい。

2.

時系列的に最初に取り上げられるのは(当然ながら)西田である。田辺、和辻、三木と比べて、デイルタイとの対峙が西田の思想の発展にとつて実りをもたらした程度は最も低かったかもしれないが、ここでは、著者の論考を一貫しているモチーフが現れている。

著者が構築する布置状況においては、さまざまなレベルで「へだたり」と同時に「近さ」が可視化される。一例を挙げよう。西田はデイルタイの理解の理論をヴェインデルバントやリツカートの歴史的認識の方法より高く評価し、それによつてデイルタイと新カント派の間にへだたりを確認する。西田のデイルタイへの近さは、主観客観の二元論を克服するために体験の概念が適していると考えた点に示される(34頁参照)。周知のように、上述の二元論を克服するのは「純粹経験」の概念の導入以来、西田の哲学的思考の核心を成すものである。しかし、別の布置状況においても近さが可視化される。つまり、新カント派とフッサールと比べ、西田のデイルタイ評価において、著者はハイデガー

との「意外な親近性」を見出している（43頁参照）。

デイルタイに対する西田の立場と、より広い文脈（新カント派、心理学、現象学、実存論的存在論、また九鬼や木村敏のような二次文献）において、著者はさまざまな布置状況の可能性を検討し、それによって自らの手法への洞察を与えている。この手法を著者は（他の布置状況において）田辺、和辻、三木に適用している。常に著者の目的は、既知のテキストに対する新しい視座を開き、それによって我々の理解を豊かにしうる可能性を開示することにある。

田辺のデイルタイ受容を著者は「家族的類似性」というキーワードのもとで論じている。私はこのヴィトゲンシュタインに由来する用語を、著者の他の著作でも主張されている伝統的な哲学の（究極的）根拠づけの要求に対する懐疑、また思考の間文化的な布置状況、哲学的言説の脱植民地化への関心への指示として読む。著者は明示的にこの傾向を終章において示している（323頁以降参照）。

「家族的類似性」を著者は、「全て」を考察の対象とするというデイルタイと田辺の要求（58頁参照）、また両者が哲学の基盤として示そうとする「生」の原理（78頁参照）において見出す。しかしながら田辺は、デイルタイの生の概念に超越の契機が欠けており、完全に内在的であると指摘する（81頁参照）。見て取れるように、家族的類似性とはへだたりは互いに排除しあうものではない。

西田と田辺よりは、デイルタイに多くを負っているのは和辻である。著者はまず和辻の日本の文化史・精神史研究に目を向け、その後に主要な哲学的著作へと移る。西田や田辺の場合と同様に、著者は和辻のデイルタイへの近さを、体験、表現、理解という解釈学の基本概念の生産的な我有化に見出している。しかし西田や田辺とは異なり、和辻はデイルタイが弁証法的思想家ではなかったとは述べず、私の見る限り、著者が扱う哲学者の中で唯一デイルタイを「克服」しようとしなかった人物である。

おそらく和辻のデイルタイへの大きな近さが、著者に一連の詳細な議論によって両者の間のへだたりを浮き彫りにさせる動機となつてゐる。それは多くの場合、著者が必ずしも適切ではないと考える和辻のデイルタイ批判を修正する目的で行われている(特に191-192頁参照)。和辻とデイルタイのへだたりを浮き彫りにするために、著者は和辻がデイルタイとハイデガーの間に見出した近さを指摘する。このように、和辻のデイルタイ批判が常に彼の「論敵」ハイデガーに向けられていたという指摘を理解できよう(193頁参照)。

デイルタイと和辻の間の影響作用史的関係の精密な研究が、細部の問題にとどまらず、より根本的な点においても我々の知識を豊かにしうることを示すかのように、著者は第5章の終わりで、和辻は本当に解釈学的哲学者と呼べるのかという問いを投げかけている(203頁参照)。この問いは、和辻研究において長く支配的であつたコンセンサスに疑問を投げかけ、それによつて和辻の思想の生産的な理解をさらに推し進めることに貢献しようという点で、なおさら正当である。

この文脈において、デイルタイと和辻の間のもう一つの近さを補足的に指摘しておきたい。それはヘーゲルに対する彼らの関係である。周知のように、デイルタイはあらゆる観念論的な過剰を嫌つてゐた。特に初期の段階では、当時の新カント派的な雰囲気の中で驚くべきことではないが、彼にとつてカントはヘーゲルよりも近い存在であつた。しかし注目すべきは、当時まだ未公刊であつた若きヘーゲルの著作との集中的な取り組みが、デイルタイに自らの初期の立場の再検討を促したことである。つまり、デイルタイは、若きヘーゲルの著作の中に、後の弁証法的な改作からまだ自由な歴史的に哲学することを発見したのである。ルドルフ・マックリールが指摘するように、このことがデイルタイをヘーゲルの客観的精神の刷新へと導いたという。ここにもへだたりと近さが見られる。

和辻との類似性は明白である。和辻もまた、体系家のヘーゲルに対して若きヘーゲルを優先した。このことは、ヘー

ゲルの『自然法論文』および『人倫の体系』との集中的な取り組みから読み取ることができる。和辻にとつて『精神現象学』は、ヘーゲルが思弁的な精神哲学へと逸脱し始めた時点を示している。和辻がここでもはや従おうとしないのは驚くべきことではない。しかし注目すべきは、このことが和辻が『精神現象学』と『法の哲学』の中心的部分を生産的な仕方では自らの『倫理学』に統合することを妨げなかつたということである。家族という人倫的な組織の度重なる言及を想起すればよいが、もちろん和辻が『倫理学』における解釈学的方法とともに人間存在の弁証法的構造を中心に据えていることも想起すべきである。解釈学と弁証法の間での和辻の揺れ動きを可視化することは、著者が我々に見ることを教えてくれた課題である。さらに、特にアメリカからの新しいヘーゲル研究の成果を考慮に入れるなら、ヘーゲルの客観的精神の哲学が和辻の『倫理学』のより事実在即した理解に寄与しうることを示唆するものが多くある。

同様に教示的なのが、三木のデイルタイ受容に関する著者の論述である。著者は、三木を「基礎経験」という概念の採用へと導いた影響作用史的な連関を、多大な注意を払って展開している。和辻の場合と同様に、著者の分析の参照点となつているのはデイルタイの他にハイデガーなのである。この分析は、その終わりに著者が新しい問題の地平を可視化する解釈過程の端緒を形成している。それは「構想力の脱植民地化」である（323頁以降参照）。そこへの道は、すでに言及した「基礎経験」から、三木のマルクス主義的な色彩を帯びた「歴史哲学」の理論と、デイルタイの「世界観学」との対決を経て、『構想力の論理』へと通じている。著者は我々をこの道に精通した仕方でも導き、その道の縁には三木のデイルタイに対するへだたりと近さが可視化されている。へだたりと近さが時として近接していることを、著者はデイルタイの「对象的把握」に関する三木の問題をはらんだ解釈において印象的に示している（292―293頁参照）。さらに重要なのは、著者が三木の講義ノートに基づいて、『構想力の論理』の構想がデイルタイとの直接

的な対決（および三木の不満）から生まれたことを証明できている点である（297頁参照）。

これらの解釈上の細部を離れて、京都学派と西洋の哲学的対話者たちとの間の布置状況にデイルタイを導入することによって、田辺、和辻、三木の間の中心的な相違が明らかになる（298―299頁参照）。著者が示すように、三木は田辺や和辻に抗して、個別的なものを類の普遍への止揚（田辺）、あるいは個人の共同体への従属（和辻）から守ろうとする。（我々は、これらの相違を強調することにおいて、著者が暗黙のうちに自らの立場を明らかにしているのだと推測することができよう。）

このことは、著者が三木とハンナ・アーレントの間に構築する新しい布置状況へと導く。そこでの著者の主たる関心は、両者の思想の政治的次元を相互に関係づけることにある。（影響作用史的な、そしてより狭い意味では事実的な）へだたりの能動的な超克は、著者を三木の構想力の論理の政治的含意とアーレントの政治的思考との間の大きな近さを浮き彫りにすることへと導く（311頁参照）。ここにも布置状況の構築の有効性と意義が示されている。

結局のところ、著者の努力は、（すでに以前の著作で主張された）哲学的言説においてこれまで聞き届けられることと、なかつた声を聞こえるようにしたいという願いに支えられている。それこそが「構想力の脱植民地化」である。近年、議論されている「グローバルヒストリー」の理論の文脈において、著者によれば、「歴史的構想力」は重要な機能を持つ。グローバルヒストリーの地平において、デイルタイの「歴史的理性批判」は「歴史的構想力の批判」へと変容されねばならない（228頁参照）。この点で、三木のデイルタイ解釈は影響作用史的な注目に値するだけでなく、むしろ我々の現代の思考を豊かにする可能性を持っているのである。

「構想力の脱植民地化」のメタ哲学的含意は、事柄それ自体との対決から生まれる。これは、ワールドフィロソフィーの枠組みにおける非西洋的思考の承認が問題となる際に通常提供されるものと比べて、はるかに説得力がある（Briet

Davis (ed.) *The Oxford Handbook of Japanese Philosophy*, New York: Oxford UP, 2020, "Introduction"における「おむね政治的に動機づけられた承認論を参照」。ある哲学的立場が承認に値するかどうかは、それが現在にいる我々にとって関心のある問いと問題を提供し、それに取り組んでいることによって証明されねばならない。思考の長い歴史が生み出したものすべてが、常にすべての人々にとって等しく重要であつたわけではない。著者が三木の事例において説得的な仕方带我々に示したように、ある思想家の重要性を証明するためには、精確な読解、立場の忍耐強い検討、そして思想家とその哲学的対話者たちとの間のへだたりと近さを明らかにする創造的な布置状況の構築が必要である。著者が本研究において一貫して体现しているのは、まさにこの解積学的態度である。この点で模範的である本書が多くの読者を獲得することを願わずにいられない。